

育児期における母親像の追究

三輪百合子, 佐々木敦子, 武井とし子

A study of the maternal image in the stage of child-rearing

Maternal love has its origin in pregnancy that sets off the physiological as well as psychological interactions between mother and fetus. After the birth of a baby, maternal affection develops through actual interactions between mother and child.

Recently we have conducted a survey to clarify the image of mothers in the stage of child-rearing. The method employed was the sentence completion test (SCT), which had been reported in our Treatises and Studies in 1988, and six areas and 19 items were covered. The survey was made on 90 mothers nursing 4 to 5 month old babies, of which 38 were primiparae and 52 multiparae.

In the relationship between mothers and their children, most reactions were positive, expressing pleasure, joy and happiness. In the family relationships, we observed increased spiritual stability reflected in the realization of the greatness of mother, thanks for the gentleness of husband, etc. On the other hand, there were some negative reactions, which were seen in the sense of inadequacy as a mother or irritation about the absence of understanding from husband.

These revealed that the psychology of mothers who are nursing their babies is characterized by constant worries, but at the same time, strong will power to carry on. Yet, because of the weakness that can sometimes lead to a nervous breakdown, the mothers engaged in baby care, we believe, are in need of external support.

Key words : motherhood, baby care, relationship in family,

はじめに

1988年, 文章完成法による妊婦の母親像について本紀要に発表した。その中で初産婦, 経産婦の母親像, 家族関係の違いが明らかとなった¹⁾。

今回は, 分娩後4~5カ月を経過した母親

を対象として同様の調査を行い, 育児期の母親像及び母親の精神的特性を明らかにし, 妊娠期との比較を行いながら検討を加えた。

方法と対象

前回は妊娠期の母子関係に焦点をあて, 川井尚²⁾の研究をもとに, 7領域38項目にわた

とほとんどを占め、その内容は「大変だが喜び」、「大変、父母に感謝」、「責任を感じる」等である。(一)の反応は初産婦7.9%、経産婦3.8%であり、内容は「苦勞、肉体労働」である。妊娠期における調査では、(+)の反応は初産婦30.6%、経産婦45.6%であり、「父母に感謝」の内容はみられなかった。また(-)の反応は初産婦69.4%、経産婦50.9%であり、「苦勞、肉体労働」の内容はみられたが、今回の調査では直接育児をすることにより、大変さの中にも喜び、楽しみ、責任感、自分自身の成長の気持ちが表れている。

表 I-2 領域 I 母親と子供の関係
項目 子供を育てることは

反応内容		初産婦 (%)		経産婦 (%)			
		育児期	妊娠期	育児期	妊娠期		
+	大変だが喜び、楽しみ	28.9	84.2	30.6	30.8	90.4	45.6
	大変、父母に感謝	26.3			25.0		
	大変だが責任を感じる	15.8			19.2		
	自分自身成長していく	7.9			5.8		
	根気と忍耐とゆとり	5.3			3.8		
	楽しい	0.0			5.8		
±	親の義務です	2.6	7.9	0.0	5.8	5.8	3.5
	時間に羽がはえたよう	5.3		0.0	0.0		
-	苦勞、肉体労働	7.9	7.9	69.4	3.8	3.8	50.9
Rej (反応のないもの)		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

(3) 私の子供はきっと (表 I-3)

表 I-3 領域 I 母親と子供の関係
項目 私の子供はきっと

反応内容		初産婦 (%)		経産婦 (%)			
		育児期	妊娠期	育児期	妊娠期		
+	元気でたくましく、丈夫	44.7	97.4	88.9	25.0	94.3	92.9
	立派に成長する、大きくなる	21.1			17.3		
	素直で明るい子	13.2			13.5		
	私に似るか	0.0			11.5		
	かわいい子、美人になる	7.9			3.8		
	しんの強い子	0.0			9.6		
	父親似	2.6			3.8		
	かしこい子	2.6			1.9		
	スポーツの好きな子	2.6			0.0		
	おしゃべりでおしゃま	2.6			0.0		
	あまえんぼう	0.0			1.9		
	おとなしい	0.0			1.9		
	家族を大切にする	0.0			1.9		
兄弟仲よし	0.0	1.9					
±	普通の子	0.0	0.0	0.0	1.9	1.9	0.0
-	短気でおこりっぽい子	0.0	0.0	8.3	3.8	3.8	5.3
Rej (反応のないもの)		2.6	2.6	2.8	0.0	0.0	1.8
合計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

(+)の反応は初産婦97.4%、経産婦94.3%とほとんどを占めており、妊娠期の調査と同様の傾向である。その内容の主なものは、「元気で丈夫」、

「立派に成長する」、「素直で明るい子」、「かわいい子」等である。(一)の反応は経産婦に3.8%とわずかながらみられ、その内容は「短気でおこりっぽい子」であった。

(4) 子供が泣きやまないと (表 I-4)

(+)の反応は初産婦34.2%、経産婦26.9%であり、妊娠期の調査結果の初産婦2.8%、経産婦10.5%に比べ多くなっている。その内容は「あやし続ける」、「散歩、だっこ」等であり、特に初産婦に「最初困ったがもう大丈夫」と、子供への直接愛着行動としての表現がみられ、実際の体験を通して育児に対する自信の芽生えがうかがえる。

(-)の反応は初産婦57.9%、経産婦69.3%

表 I-4 領域 I 母親と子供の関係
項目 子供が泣きやまない

反応内容		初産婦 (%)		経産婦 (%)			
		育児期	妊娠期	育児期	妊娠期		
+	あやし続ける, 抱いて話しかける	21.1	34.2	2.8	17.3	26.9	10.5
	散歩して, だっこして, おっぱい	5.3			9.6		
	最初困ったがもう大丈夫	7.9			0.0		
±	原因は何だろう	5.3	7.9	2.8	1.9	3.8	3.5
	今の所ない	2.6			0.0		
	何かある	0.0			1.9		
受容的	一緒に泣きたい, 悲しくなる	34.2	55.3	77.7	13.5	40.4	43.8
	具合が悪いか心配	13.2			15.4		
	どうしたらよいのだろう	7.9			7.7		
	大丈夫かな	0.0			3.8		
非受容的	うるさい, いらいらする	0.0	2.6	13.9	21.2	28.9	40.4
	しばらくほっておく	0.0			3.8		
	だんだん疲れてくる	2.6			0.0		
	おしりをたたく	0.0			1.9		
	忙しい	0.0			1.9		
Rej (反応のないもの)		0.0	0.0	2.8	0.0	0.0	1.8
合計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表 I-5 領域 I 母親と子供の関係
項目 私は母親として

反応内容		初産婦 (%)		経産婦 (%)			
		育児期	妊娠期	育児期	妊娠期		
+	がんばってよい母親になりたい	23.7	76.3	61.1	32.7	67.3	47.4
	子供を温かく見守りたい	18.4			5.8		
	ゆとりを持ちたい	7.9			13.5		
	子供と共に成長する	13.2			5.8		
	まあまあ	7.9			7.7		
	子供に真剣に接する	5.3			1.9		
±	その他	5.3	5.3	8.3	1.9	1.9	8.8
-	まだまだ未熟	10.5	15.8	27.8	17.3	28.9	40.3
	一人前になれるか不安	5.3			1.9		
	失格, 感情的	0.0			9.6		
Rej (反応のないもの)		2.6	2.6	2.8	1.9	1.9	3.5
合計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

を占めている。泣きやまぬ子供に対し、母親として対応に苦慮しながらも、子供の存在を受容したものと考えられる受容的反応は初産婦55.3%、経産婦40.4%である。妊娠期の調査では受容的反応が初産婦77.7%であり、今回、減少がみられるが、これは育児体験を通して実際の育児行動へ向かう(+)の反応に変

化したものである。また、子供に対する非受容的感情表現は初産婦2.6%、経産婦28.9%と経産婦に多く、妊娠期の調査と同様の傾向がみられた。受容的反応の内容は「一緒に泣きたい」、「具合が悪い心配」等であり、非受容的反応内容は「うるさい、いらいらする」が主なものである。

(5) 私は母親として(表 I-5)

(+)の反応は初産婦76.3%、経産婦67.3%であり、その内容は「頑張ってよい母親になりたい」、「子供を温かく見守りたい」、「ゆとりをもつ」、「子供と共に成長する」等である。これは妊娠期の調査よりやや多くなっているが、内容はほぼ同様である。(-)の反応は初産婦15.8%、経産婦28.9%で、内容は「まだまだ未熟」、「一人前になれるか不安」であった。妊娠期の調査との比較では初産

婦・経産婦共やや減少がみられるが、妊娠期の調査でみられた初産婦・経産婦の特徴的な内容の差(初産婦は育児に対する不安、経産婦は自分の未熟さに対する反省が多かった)はみられなかった。

以下に領域 I の母親と子どもの関係をまとめる。

(1)私は子供と、(3)私の子供はきつとの反応のように、子供に対する愛着の反応としては、ほとんどの人が妊娠期と同様(+)の反応を示している。しかし経産婦の中には、怒鳴っていることへの反省の気持ちや、たまにいなければと思う拒否的な感情もわずかにみられた。これは上の子供との関わりの中での反応と思われる。また、(2)子供を育てることは、

(4)子供が泣きやまないとの反応のように、子供に対する愛着の行動面では、妊娠期は(-)の反応が多くを占めていたが、育児期では(+)の反応に移行していることがわかる。妊娠期は漠然とした不安の感情が、育児を体験することで直接愛着行動へと結び付いた結果である。しかし“子供の泣き”に対する否定的な感情表現が、妊娠期と同様経産婦に多いことが注目される。

2. 領域II 父親と子供の関係

(1) 赤ちゃんが生まれた(る)と聞いて夫は(表II-1)

(+)の反応が初産婦92.1%、経産婦94.2%であり、内容は「大喜び、感動」、「ほっと安心した様子」、「いたわってくれた」等である。(-)の反応は初産婦は無く、経産婦に3.9%みられた。内容

は子供の性別に対する不満の内容等であった。

妊娠期の調査と比較してほぼ同様の傾向であるが、(-)の反応内容で不安、複雑、困惑の態度がみられたが、今回の調査ではなかった。

(2) 夫と子供は(表II-2)

(+)の反応は初産婦86.9%、経産婦84.6%

表II-1 領域II 父親と子供の関係
項目 赤ちゃんが生まれた(る)と聞いて夫は

反 応 内 容		初 産 婦 (%)		経 産 婦 (%)		
		育 児 期	妊 娠 期	育 児 期	妊 娠 期	
+	大喜び、感動、ばんざい	63.2	92.1	94.4	65.4	93.0
	ほっと安心した様子	5.3			19.2	
	いたわってくれた「ごころうさん」	10.5			7.7	
	すぐ病院に来てくれた	13.2			1.9	
±	一度聞いてみたい	2.6	5.3	0.0	0.0	0.0
	びっくり	2.6			0.0	
-	女の子と聞いて「そうかい」	0.0	0.0	5.6	1.9	7.0
	少し小さかったので心配した	0.0			1.9	
Rej (反応のないもの)		2.6	2.6	0.0	1.9	1.9
合 計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表II-2 領域II 父親と子供の関係
項目 夫と子供は

反 応 内 容		初 産 婦 (%)		経 産 婦 (%)		
		育 児 期	妊 娠 期	育 児 期	妊 娠 期	
+	とても仲良し、よく遊ぶ	15.8	86.9	86.1	44.2	87.7
	私にとって大切な家族	23.7			19.2	
	よい関係になるだろう	15.8			5.8	
	スキンシップをしている	10.5			5.8	
	よく似ている	13.2			3.8	
	健康でいてほしい	0.0			3.8	
	親子として最高	2.6			1.9	
	幸せを感じる	2.6			0.0	
	よきライバルになると思う	2.6			0.0	
±	こんなもんでしょう	0.0	0.0	0.0	1.9	0.0
	たまに出かける	0.0			1.9	
-	接する時間が少ない	5.3	10.5	5.6	5.8	7.0
	もっと協力すべき	0.0			3.8	
	子供がなつかない	2.6			1.9	
	まだまだ	2.6			0.0	
Rej (反応のないもの)		2.6	2.6	8.3	0.0	0.0
合 計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

で、内容は「仲良し、よく遊ぶ」、「大切な家族」、「よい関係になるだろう」が主なものであった。(一)の反応は初産婦10.5%、経産婦11.5%にみられ、「接する時間が少ない」、「子供がなつかない」等であり、経産婦には「もっと協力すべき」との要求の表現もみられた。

妊娠期との比較でも同様の傾向であった。

以下に領域Ⅱの父親と子どもの関係をまとめる。

妻からみて多くの夫は、妊娠出産を喜び、無事出産を終えたことへの安堵の気持ちがうかがえる。夫と子供との関係については妊娠期と同様、よい関係を願う気持ちと、夫と子供を大切に思う妻として、母親としての感情が表れている。

3. 領域Ⅲ 夫婦の関係 (1) 夫に対して私は(表Ⅲ-1)

(+)の反応が初産婦・経産婦共71.1%であり、内容は「よき妻、理解者でありたい」、「感謝、信頼している」、「かまってあげられなくなった」等が主なものである。(一)の反応は初産婦23.7%、経産婦23.1%で、内容は「育児に協力してほしい」、「喧嘩するようになった」、「新鮮な気持ちなくなっている」等、

初産婦・経産婦共同様の傾向であった。

妊娠期との比較では、(+)の内容は同様の傾向がみられたが、(一)の内容において妊娠期は、イライラやつっけんどの反応が多かったが、今回は育児に対する協力の要求が多くみられた。

表Ⅲ-1 領域Ⅲ 夫婦の関係
項目 夫に対して私は

反 応 内 容	初 産 婦 (%)		経 産 婦 (%)				
	育児期	妊娠期	育児期	妊娠期			
+	よき妻、理解者でありたい	15.8	71.1	75.0	28.8	71.1	68.4
	感謝、信頼している	21.1			19.2		
	かまってあげられなくなった	13.2			11.5		
	優しく、いたわる	10.5			5.8		
	甘えたいがしっかりしよう	10.5			3.8		
	健康であってほしい	0.0			1.9		
±	わからない	0.0	2.6	0.0	5.8	5.8	3.5
	強くなった	2.6			0.0		
-	育児に協力してほしい	13.2	23.7	22.2	11.5	23.1	24.6
	喧嘩するようになった	5.3			0.0		
	新鮮な気持ちなくなっている	2.6			1.9		
	冷たくなった	0.0			3.8		
	もっと計画性をもってほしい	2.6			0.0		
	会話がなくなった	0.0			1.9		
	期待していない	0.0			1.9		
	自分勝手だと思う	0.0			1.9		
Rej (反応のないもの)	2.6	2.6	2.8	0.0	0.0	3.5	
合 計	100.0	100.0	100.0	100.0			

表Ⅲ-2 領域Ⅲ 夫婦の関係
項目 私が出産(妊娠)して夫の変わったことは

反 応 内 容	初 産 婦 (%)		経 産 婦 (%)				
	育児期	妊娠期	育児期	妊娠期			
+	家事、育児など協力してくれる	23.7	71.1	83.3	38.5	61.6	73.7
	優しくなった	23.7			17.3		
	子供がかわいくて仕方がない	13.2			0.0		
	父親としての自覚が出た	7.9			1.9		
	気長に辛抱強く待ってくれる	0.0			3.8		
	もっと仕事をするようになった	2.6			0.0		
-	変わらない	13.2	26.3	16.7	30.8	34.6	26.3
	私をかまってくれない	13.2			0.0		
	私を女として見なくなった	0.0			1.9		
	家事に参加しなくなった	0.0			1.9		
Rej (反応のないもの)	2.6	2.6	0.0	3.8	3.8	0.0	
合 計	100.0	100.0	100.0	100.0			

婦23.7%，経産婦19.2%であり，内容は「母乳が出なく申し訳ない」が13.2%，11.5%と半数を占め，その他「下がってしまった」，「コンプレックスをもっている」等，形態的なものへの否定的反応がみられる。

妊娠期との比較では，初産婦・経産婦共(一)の反応が増加している。妊娠期の(一)の内容は，陥没乳頭や張ってこないことへの不安がわずかにみられただけであるが，分娩後は母乳分泌不足について悩みは増大している。

(3) 私のからだは (表IV-3)

(+)の反応は初産婦50.0%，経産婦44.3%である。その内容は「健康である」，「もとに戻った」，「一人のものではない」，「身体をたいせつにしたい」等が主なものでり，健康に回復することの大切さが表れている。(一)の反応は初産婦44.8%，経産婦50.0%と妊娠期より多く，その内容は「もとに戻らうか」，「体重が減らない」，「おしり，お腹が出てしまりがない」，「気が付いたらポロポロ」等が主なものであり，健康に回復することの大切さが表れている。(一)の反応は初産婦44.8%，経産婦50.0%と妊娠期より多く，その内容は「もとに戻らうか」，「体重が減らない」，「おしり，お腹が出てしまりがない」，「気が付いたらポロポロ」

表IV-2 領域IV 女性性
項目 乳房

反 応 内 容	初 産 婦 (%)		経 産 婦 (%)	
	育児期	妊娠期	育児期	妊娠期
母乳が出て幸せ	28.9		21.2	
赤ちゃんの心休まる場所	5.3		21.2	
赤ちゃんにとって大切	10.5		5.8	
不思議，時間がくると張る	7.9		5.8	
母であると実感する	5.3	71.1	7.7	76.9
授乳は女性の特権，美しい	7.9		3.8	
ミルクタンク	0.0		9.6	
張ることがわかるようになった	5.3		0.0	
とても便利	0.0		1.9	
着るものに困る	2.6	5.2	1.9	3.9
マッサージが必要	2.6		1.9	
母乳が出なく申し訳ない	13.2		11.5	
下がってしまった	2.6		5.8	
コンプレックスを持っている	2.6	23.7	1.9	19.2
いつまで出るか心配	2.6		0.0	
偏平乳頭，亀裂	2.6		0.0	
Rej (反応のないもの)	0.0	0.0	5.6	0.0
合 計	100.0	100.0	100.0	100.0

表IV-3 領域IV 女性性
項目 私のからだは

反 応 内 容	初 産 婦 (%)		経 産 婦 (%)	
	育児期	妊娠期	育児期	妊娠期
健康である，順調に回復	13.2		15.4	
もとに戻った	13.2		5.8	
一人のものではないと感じる	10.5		3.8	
身体をたいせつにしたい	0.0	50.0	9.6	44.3
たくましくなった，成長した	5.3		3.8	
女っぽく母の体型になった	5.3		1.9	
もとに戻るよう努力する	2.6		3.8	
変わりました	2.6	2.6	0.0	1.9
二人の子供を産んだ	0.0		1.9	14.0
もとに戻るのだろうか	13.2		11.5	
体重が減らない	13.2		9.6	
おしり，お腹が出てしまりがない	5.3		15.4	
気が付いたらポロポロ	0.0		11.5	
やせてしまった	2.6	44.8	1.9	50.0
出血が続き腰痛がある	2.6		0.0	
母乳が出ない	2.6		0.0	
手足のしびれがとれない	2.6		0.0	
髪の毛が抜けて心配	2.6		0.0	
Rej (反応のないもの)	2.6	2.6	8.3	3.8
合 計	100.0	100.0	100.0	100.0

ロ」等，形態的変化，体力減退に対する不安の反応が多くみられた。

妊娠期との比較では(一)の反応が増加していることがわかる。

(4) 性 (表IV-4)

(+)の反応は初産婦50.0%，経産婦42.3%と両者ともほぼ半数となっている。その内容は「神秘，不思議」が21.1%，15.4%と最も多く，その他「喜び，大切なこと」，「性格のよい子に育って」，「自然なこと」等であった。(±)の反応は初産婦34.2%，経産婦28.9%であり，内容は「男と女」，「性教育を考える」，「母性優先」等である。(一)の反応は初産婦2.6%，経産婦19.2%と経産婦に多く，内容は「面倒くさい，難しい」がほとんどを占めている。

妊娠期との比較では，経産婦で(一)の反応が多くなっていることがわかる。

以下に領域IVの女性性についてまとめる。

女性として喜び，幸せを感じ，今の自分に満足する感情は妊娠期と同様である。特に初産婦において，妊娠期にみられた否定的感情が減少し，育児経験を通し，女性として生まれたことへの充実感がうかがえる。乳房については，母乳が出ること飲ませることで，子供とのつながりを大切に思う反面，分泌不良に対する落胆の気持ちも強く，妊娠期にみられた形態的変化への不安は減少している。

からだの変化では，健康で順調に回復することを喜び，大切にしていこうと考える反面，形態的，体力的にもとへ戻るかという不安の

表IV-4 領域IV 女性性
項目 性

反 応 内 容		初 産 婦 (%)		経 産 婦 (%)			
		育児期	妊娠期	育児期	妊娠期		
+	神秘，不思議	21.1	50.0	50.0	15.4	42.3	33.3
	喜び，大切なこと	10.5			5.8		
	性格のよい子に育って	7.9			7.7		
	自然なこと，コミュニケーション	5.3			7.7		
	女性に生まれてよかった	2.6			5.8		
	愛があれば	2.6			0.0		
±	男と女	18.4	34.2	30.5	9.6	28.9	45.6
	性教育を考える	5.3			13.5		
	今の所重要ではない，母性優先	5.3			0.0		
	逃れられない問題	2.6			1.9		
	子供はもういらぬ	0.0			3.8		
	性生活が変わった	2.6			0.0		
-	面倒くさい，難しい	0.0	2.6	5.6	17.3	19.2	8.8
	性差別は家庭の中にある	2.6			0.0		
	中性になってしまった	0.0			1.9		
Rej (反応のいもの)		13.2	13.2	13.9	9.6	9.6	12.3
合 計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	

感情が増加している。性については妊娠期と同様，神秘で不思議で，大切なことと考えられている。経産婦では性教育の大切さを考え始めていること，また面倒くさいと考える気持ちが増加している。

5. 領域V 母親自身のこと

(1) 私が泣きたくなるのは (表V-1)

この項目と次の項目は，妊娠期と同様に子供や家族との関係，また自分自身の反応について分類した。

泣きたくなるのは身の出来事による葛藤であり，初産婦の場合，妊娠期は「思い通りにならない」等，自分自身に対する葛藤の反応が44.5%，「夫がわかってくれない」等，家族に対する葛藤の反応が22.2%と多くみられたが，今回の調査では，自分自身に対する反応は18.4%，家族に対する反応が7.9%と減少している。その反面，当然ながら子供との関係における葛藤は60.6%と増加している。その内容は「泣きやまない」，「病氣」が主なも

のである。

経産婦では、子供との関係における反応53.8%、家族との関係における反応17.3%、自分自身の葛藤が23.1%であり、妊娠期の調査と同様の傾向であった。

(2) 心配なことは(表V-2)

子供に対する反応が初産婦86.9%、経産婦71.1%と最も多く、内容は「子供の健康や成長」がそれぞれ78.9%、55.8%とそのほとんどを占めている。家族との関係における反応が初産婦2.6%、経産婦5.8%、母親自身の問題が初産婦7.9%、経産婦9.6%である。

妊娠期は母親自身の問題が初産婦44.4%、経産婦28.1%と多かったが、それは、無事に分娩ができるかとの内容がほとんどであったが、育児期には、子供に対する心配が増している。

(3) 私は将来(表V-3)

(+)の反応は初産婦84.2%、経産婦90.4%とほとんどを占めている。

内容は「仕事、趣味、自分の生き方」が一番多く、特に経産婦では44.2%と半数を占めている。これは、妊娠期の調査と同様の結果で

表V-1 領域V 母親自身のこと
項目 私が泣きたくなるのは

反応内容		初産婦(%)		経産婦(%)			
		育児期	妊娠期	育児期	妊娠期	妊娠期	
	ない	10.5	10.5	13.9	5.8	5.8	12.3
子供	子供が泣きやまないとき	47.4			32.7		
	子供の病気	10.5			7.7		
	子供が言うことをきかない	0.0	60.6	11.1	9.6	53.8	38.6
	子供の笑顔を見るととき(感激)	2.6			0.0		
	子供が離れていくのを感じたとき	0.0			1.9		
	子供を叱ったとき	0.0			1.9		
家族	夫と喧嘩、わかってくれない	0.0			15.4		
	育児に疲れても協力してくれない	5.3	7.9	22.2	1.9	17.3	19.3
	家族の病気	2.6			0.0		
母親自身	育児が思いどおりできないとき	5.3			7.7		
	育児に追われて何もできない	2.6			7.7		
	寝不足、好きだけ眠りたい	7.9	18.4	44.5	0.0	23.1	24.5
	自分が病気になったとき	0.0			5.8		
	ストレスが発散できないとき	2.6			1.9		
Rej(反応のないもの)		2.6	2.6	8.3	0.0	0.0	5.3
合計		100.0		100.0	100.0		100.0

表V-2 領域V 母親自身のこと
項目 心配なことは

反応内容		初産婦(%)		経産婦(%)			
		育児期	妊娠期	育児期	妊娠期	妊娠期	
	ない(考えていなかった)	2.6	2.6	5.6	5.8	5.8	10.5
子供	子供の健康な成長	78.9			55.8		
	子供の将来	7.9			5.8		
	上の子の育て方	0.0	86.9	50.0	5.8	71.1	56.1
	母乳で足りているか	0.0			1.9		
	男の子を育てること	0.0			1.9		
家族	家族の健康と事故	0.0			3.8		
	姑との育児方針のちがいがい	2.6	2.6	0.0	0.0	5.8	5.3
	事業が成功すること	0.0			1.9		
母親自身	あっても何とかなるだろう	2.6			1.9		
	育休後の仕事	2.6			1.9		
	たくさんある	0.0	7.9	44.4	3.8	9.6	28.1
	生活の変化	2.6			0.0		
	自分の健康	0.0			1.9		
その他(食品公害等)		0.0	0.0	0.0	7.7	7.7	0.0
Rej(反応のないもの)		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合計		100.0		100.0	100.0		100.0

ある。その他は「よい母になりたい」、「平凡に、幸せに」、「子供の成長が楽しみ」等である。(一)の反応は初産婦7.9%、経産婦3.8%

とわずかにみられたが、
妊娠期と同様に不安や自
身のなさを訴えていた。

妊娠期との比較で特徴
的なことは、初産婦にお
いて妊娠期はよい母にな
り、子供との楽しい生活
に夢を持つ反応が多くみ
られ、仕事や趣味を持ち
自分の生き方を考える反
応が8.3%と少なかった
が、今回は23.7%と増加
し、経産婦と同様の傾向
になった。

(4) 困り果てたとき私は
(表V-4)

(+)の反応は初産婦
79.0%で、全て夫や実家
の両親その他に相談する
ことで解決の道を探ろう
としている。経産婦は
96.2%であるが、相談す
ると反応したものは
63.5%であり、他の
32.7%は「何とかなるだ
らうと思う」、「しばらく
頭を冷やす」、「力強く前
進する」等、自分自身で
解決の糸口を求めようと
する努力がみられる。

(-)の反応は初産婦
18.4%、経産婦1.9%と初
産婦に多く、内容は「いら
いらして泣いてしまう」、「
黙り込んでしまう」、「相
談する人がいない」等、内
向的に反応している。

妊娠期との比較では、
経産婦において(-)の
内向的反応の減少がみら
れる。

表V-3 領域V 母親自身のこと
項目 私は将来

反 応 内 容		初 産 婦 (%)		経 産 婦 (%)			
		育児期	妊娠期	育児期	妊娠期		
+	仕事, 趣味, 自分の生き方	23.7	84.2	88.8	44.2	90.4	82.4
	よい母親になりたい	18.4			7.7		
	平凡に, 幸せに暮らしたい	13.2			7.7		
	子供の成長が楽しみ	5.3			9.6		
	子供と楽しく暮らす	7.9			5.8		
	夫と二人で旅行したい	2.6			7.7		
	母のようになりまい	2.6			5.8		
	何人の子供に恵まれるか	7.9			0.0		
	生き生きとしていたい	2.6			1.9		
±	変わらない	5.3	5.3	0.0	5.8	5.8	0.0
-	母として心配	2.6	7.9	5.6	1.9	3.8	12.3
	考えてことがない	2.6			1.9		
	子供夫婦とは別居する	2.6			0.0		
Rej (反応のないもの)		2.6	2.6	5.6	0.0	0.0	5.3
合 計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	

表V-4 領域V 母親自身のこと
項目 困り果てたとき私は

反 応 内 容		初 産 婦 (%)		経 産 婦 (%)				
		育児期	妊娠期	育児期	妊娠期			
+	相談する	夫に	31.6	79.0	72.2	63.5	63.2	
		実家の両親に	26.3					26.9
		いろいろな人に	7.9					15.4
		家族に	7.9					19.2
		友達に	5.3					1.9
	自分で解決する	何とかなるだろうと思う	0.0	0.0	5.6	32.7	12.2	
		しばらく頭を冷やす	0.0					13.5
		力強く前進する	0.0					7.7
		寝て忘れることにしている	0.0					5.8
	母のやったことを思い出す	0.0	1.9					
	神に祈る	0.0	1.9					
-	いらいらして泣いてしまう	7.9	18.4	19.4	1.9	1.9	19.3	
	黙り込んでしまう	5.3			0.0			
	相談する人がなく困る	5.3			0.0			
Rej (反応のないもの)		2.6	2.6	2.8	1.9	1.9	5.3	
合 計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0		

(5) 仕事 (表V-5)

(+)の反応が初産婦92.1%、
経産婦84.6%を占めている。
内容として「子供を育てる
こと」と自分自身の仕事を
位置づけているものは
初産婦26.3%、経産婦34.6%
と一番多いが、

誰かに相談する者が多いが、経産婦は自分で解決の道を開いているものが1/3にみられ、育児経験の中で培った母の強さを感じさせる。仕事については、子育てを自分自身の仕事と位置づけているものが多くなっている。

6. 領域VI 母親自身の親子関係

(1) 母は(表VI)

(+)の反応は初産婦86.9%，経産婦88.5%であり、その内容は「孫をかわいがる」、「偉大、すごい、尊敬」、「強いと実感」、「心のよりどころ」等が主なものである。(−)の反応は初産婦7.9%，経産婦7.7%であり、内容は「考え方がやや狭い」等、母親に対する批判的な感情として表現されている。これは妊娠期と同様の傾向である。

妊娠期との比較で特徴的なことは、(+)の反応内容において、妊娠期は漠然とした優しさや温かさの反応が多くみられたが、出産を終え、育児を体験している現在、母の偉大さ、

母への尊敬、母の強さを実感した内容が多くみられた。

考 察

1. 母性愛

母と子の相互作用は、妊娠に気づいた時から生理的な相互作用のみでなく、心理的レベルでも始まると考えられ³⁾、更に出産は母性意識の再確認をすることで、妊娠期より培われた母性愛をより高次のものに推進する労作でもあるといわれている⁴⁾。そして更に育児期において母と子の相互作用(図1)を通して愛着感情(母性愛)が発達していくと言われている⁵⁾。今回、妊娠期の調査を基として、育児期における母性の発達と母親像の特性を考えた。

自分の母親に対する感情(領域VI)として、ポジティブな反応が多いが、妊娠期に持っていた漠然とした母に対する優しさや、温かさ

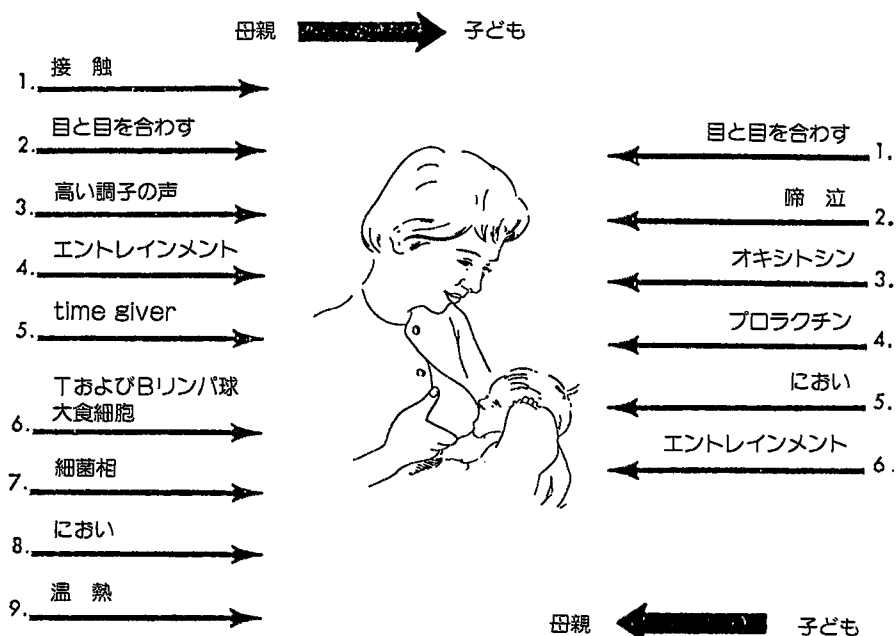


図1 生後数日に同時的に起こる母から子へ、子から母へ働く相互作用⁵⁾。
(写真部分改変)

の感情から、育児期は母の偉大さ、強さへの感情が強くなっている。これは育児体験を通して、改めて母親の偉大さに気づき、感謝と尊敬の気持ちを持ち、ひいては自分自身の母親像を見つめることへとつながっていると考えられる。

大日向⁶⁾は、母性を「生理的・生物的側面」、「社会的・文化的側面」、「個(パーソナリティや対人関係など)に関する側面」の3つから把握することを提起している。「生理的・生物的側面」として、女性の妊娠・分娩・哺乳能力があげられる。その中で子供に対する愛情や養育態度は、産む性を持つ生得的で生理的な特性として見なす考え方は、社会通念としてはかなり普遍性の高いものであると述べている。

今回の調査でも、母親と子供の関係(領域I)において、子供と一緒にいるのが楽しく、幸せであり、子供を育てることは大変だが喜び、幸せを感じ、私の子供はきっと元気で、丈夫で、立派に成長するとの、子供に対するポジティブな愛着感情の反応がほとんどを占めていた。これらの反応から、子供に対する愛着感情は、女性の持つ生理的・生物的特性に基づくものがあると考えられる。また、父親と子供の関係(領域II)では、夫が父親となったことを喜び、子供とのよい関係を築いていることに満足を感じ、また、実際的な家事、育児のサポートに対する感謝の気持ちが表れている。育児の忙しさの中で夫の優しさを感じ、更に実際的なサポートが得られることは、母親の安定した愛着感情の発達に大切なことと思われる。

母親としての情緒的、愛着行動の発達は、母親が自身自分の親を同一視することに始まり、自分が子供時代に経験した感情、行動をもとにしているといわれている⁷⁾。母親が子

供に対し、ポジティブな感情、育児態度、育児行動をとることは、子供のパーソナリティ形成に大変重要となる。

2. 育児期の不安

育児期の母親は、子供との相互関係の中で喜びや幸せを感じ、母親となった充実感を持つ時期であると同時に、妊娠分娩を経過し、身体的に内分泌系や形態面の劇的な変化が生じ、更に家族としてのライフサイクルの変化から、精神的緊張を余儀なくされる時期でもある⁸⁾。

母親と子供の関係(領域I)において、子供が泣きやまないことに対し、一緒に泣きたい、悲しくなる、うるさい、いらいらする等が初産婦58%、経産婦69%にみられ、私は母親として未熟、不安を感じる等の反応が初産婦16%、経産婦29%にみられた。また、母親自身の事(領域V)では、泣きたくなくなるのは育児が思い通りできないこと、育児に追われて何もできないこと、自分自身の感情コントロールができないこと等の反応がみられた。これらの反応は、生理的・生物的母性愛の絶対性、普遍性に相反する反応と考えられる。

また、乳房については、母乳分泌不足に対する不安や形態的コンプレックスを持つ者が初産婦23%、経産婦20%、身体が元に戻るか、また、健康状態に不安を持つものが初産婦45%、経産婦50%にみられた。母乳分泌不良により、母親としての役割責任の意識から、母乳ノイローゼになる母親がいることは臨床において経験している。このような場合でも、母乳分泌には個人差があることや、心理的要因によって左右されること等を説明し、人工栄養でも栄養的、また、子供に対する愛着形成疎外因子とはならないこと等、柔軟で多面的な対応が必要となる。

身体面については、今後、クリエイティブ

な人生を展開していくためにも体力、体型の劣化を早期に回復する必要があり⁹⁾、積極的に運動療法等日常生活の中に取り入れる努力が払われなければならない。

家族関係における問題として、父親と子供の関係(領域II)では、夫が子供と愛着関係を築いていないことに不安を抱いていたり、夫婦の関係(領域III)では、育児に協力しない夫

や、出産後も何の変化もみられない夫に対する不満がみられる。また、育児期は子供中心の生活となるため、自分自身、妻としての存在を認められない為に持つ不満が初産婦にみられた。これは未熟な感情発達の表れとも判断できる。

母親自身泣きたくなることや心配なことは(領域V)、子供の健康や成長、将来のこと等子供のことはもちろん、母親自身の感情がコントロールできないことや、家族(特に夫)がわかってこないことへの不満を持っている。大日向¹⁰⁾の調査においても、夫に対する否定的感情と育児中の心理的不安定さとに相関があるとしている。

このような様々な葛藤の中で母親自身困り果てた時は、初産婦80%、経産婦60%のものは家族に相談し、協力を求めることで解決の道をさぐっている。しかし中には相談する人もなく、いらいらし、黙り込んでしまう母親

表VII 産褥期のストレス¹¹⁾

内分泌系の急変(嵐) 胎盤由来のホルモン(プロゲステロン、エストロゲン)の急減 授乳のためのプロラクチンの分泌 情動系と運動・情報処理調節系(ドパミン系など)への影響 分娩・育児による身体の疲労 分娩による消耗(陣痛、心血管系への負荷、乏血など) 育児による作業量の増大(授乳、抱く、おむつ交換、沐浴、洗濯など) 部分断眠に近い眠り(夜間授乳) 育児による心理的疲労 新生児の予測困難な変化・疾病への対応(初産婦) 注意の持続的維持と効率的分配(経産婦:上の子と新生児) 同じ動作・姿勢の反復・維持 移動の制限 逃げられない関係の始まり(ある種の拘禁)の自覚 妊娠中の相対的保護環境の剝奪 役割の多様化と社会的関係の複雑化 育児=母親、主婦、妻ときに嫁としての役割 配偶者の家族、親戚、近隣との陰陽の交流の増大 周囲の役割期待の増大 周囲の精神病理への感度の上昇(特に配偶者の親族) 家計支出の増大 身体的魅力の変化 新生児の身体異常

表VIII 産褥期のストレスを克服する通常条件¹¹⁾

誕生の喜び 新生児の安全 自らと周囲の期待に応えた達成感 母性の芽生え 新生児の引き起こす可愛さと保護の感情 子どもの変化・成長 自らの生命の連続性の確認 成熟 家族の絆帯の深まり 社会的交流とつながりの拡大 経験と知識、慣れによる予測可能性の増大 周囲の喜びと援助による負担の軽減 夫の理解、協力、子どもへの愛情 実母などの援助(里帰り等)
--

もいる。岡崎ら¹¹⁾は、育児期にある母親のストレスとストレスを克服する条件を表VII、表VIIIのようにまとめている。

現代社会において、様々な社会的文化的背景や、個に関する背景も多様化し、家族を含めた育児支援体制の必要性がいられている¹²⁾。母性を女性の生理的・生物学的側面からの

みとらえ、美化する風潮のもとで、育児に挫折し、自分自身の感情コントロールができなくなった母親を母性失格と非難するだけにとどめず、積極的に母親の弱さや欠点を認め、ネガティブな感情表出を受け止め、援助する態度や、育児支援システムづくりが重要となる。

おわりに

文章完成法を用いて、妊娠期、育児期の比較から育児期における母親像を明らかにし、母親としての愛着感情の発達をみてきた。初産婦において明らかのように、妊娠期に持つ漠然とした母親像から実際の育児を通して具体的な母親像を持つことができおり、その中で愛着感情が発達し、愛着行動へと結び付いていることがわかった。また、よりよい母子関係を築いていくために、母親のネガティブな感情表出を受け止め、母親自身の背景や、家族関係を考慮した指導が重要となる。また、家族のサポートの重要性も認識することができた。

文 献

1) 佐々木敦子, 武井とし子, 三輪百合子: 文章完成法による妊婦の母親像, 信州大学医療短大紀

要, 14(2): 81-107, 1988.

2) 川井尚: 妊娠期の心と母子関係, 助産婦雑誌, 136(6): 465-472, 1984.

3) 川井尚: 妊婦と胎児の結びつき—SCT-PKSによる妊娠期の母子関係の研究—, 周産期医学, 13 臨時増刊: 2141-2146, 1983.

4) 村松功雄: 母性の精神衛生, 271-279, 東出版, 東京, 1971.

5) Klaus, M. H., Kennell, J. H., 竹内徹他訳: 母と子のきずな—母子関係の原点をさぐる—, 医学書院, 1981.

6) 大日向雅美: 母性をめぐる現状と課題, 我妻堯, 前原澄子編「助産学講座3」: 3-27, 1991.

7) 市橋保雄: 親と子のきずなを考える, 周産期医学, 13 臨時増刊: 1805-1806, 1983.

8) 川越慎之助: マタニティーブルースと産後うつ病, 周産期医学, 20 臨時増刊: 38-41, 1990.

9) 田中泰博: マタニティービクスとアフタービクスおよび運動が苦手な妊婦へのアプローチ, 周産期医学, 20 臨時増刊: 98-102, 1990.

10) 大日向雅美: 母性性の発達—妊産婦の心の動きを中心として—, 助産婦雑誌, 41(12): 1004-1010, 1987.

11) 岡崎裕士, 畑田けい子: 妊娠期と産褥期の精神障害, 産婦人科治療, 63(3): 323-329, 1991.

12) 前掲6)

受付日: 1991年10月12日

受理日: 1991年11月21日